

# 中上級クラスにおける速読練習と 読解ストラテジーへの影響 —学習者へのアンケート調査から—

和氣圭子

## 要 旨

読解の学習においては、学習者のレベルが上がるにしたいが、新しい語彙・文法を学び、理解するための「言語指向の読解」から、「内容指向の読解」へ移行していくのが理想と言われる（岡（1994、1998））。「解説」から「読解」へ、ということである。だが実際の中上級読解クラスの学習者には、語彙力も文法力もありながら、一つ一つ確認しないと次へ進めない学習者や、逆に、かなりの速度で文章を読んでいるものの内容理解が不正確である学習者が見られる。

この点を改善し、速く正確に読む読み方を身につけることを目標として、新聞記事を使った速読練習を行った。8～9回の授業後、学習者にアンケート調査を行い、文章の読み方等に変化があったと思うかどうかを尋ねた。本稿はそのアンケート調査の結果報告である。

【キーワード】 速読、中上級、言語指向、内容指向、読み方の変化

## On the Effect of Speed Reading Practice on Intermediate/Advanced Learners

Waki, Keiko

### Abstract

This is a report on the effect of speed reading practice on reading strategies of intermediate/advanced learners. In each class, learners were given 1 to 2 newspaper articles to read within a time limit, followed by some questions on the content. The comments from a questionnaire at the end of the course (which comprised 8 to 9 classes) showed that about 90% of learners felt that the practice was effective, and about half of the learners thought it changed their way of reading. Learners without Kanji background showed a tendency to change their approach from decoding to reading, i.e. reading without stopping at each word, and using inference to cope with unknown words. Speed reading practice was therefore not only effective in increasing reading speed, but also induced better reading strategies.

## 1. はじめに

筆者の担当する補講「読解4」(中上級レベル)では、毎回異なる文章を宿題として課し、だいたい理解するまでにかかった時間を記入してもらっている。読みにかかった時間で、その学習者にとっての教材の難易度がある程度計れるだろう、という意図なのだが、新聞記事であれ小説であれ、内容や難易度に関わらず、毎回ほぼ同じ短い時間で読んでくる学習者がいる。必ずしも読解力が高いわけではなく、内容理解などの課題部分は不正確であったり、表面的な読み方をしていたりする。また逆に、とにかく何でも一つ一つ調べ上げ、どの教材にも非常に長い時間をかける学習者もいる。読解授業の宿題であるから、きちんと理解しようという姿勢は高く評価できるのだが、授業外の資料、素材でも同じように一つ一つ分析して読んでいるのではないか、と思わせるところがある。

岡(1998)は文章の読み方に二種類の方法をあげている。一つは「言語指向の精読」で、文法、語彙の学習・定着と、文構造の理解に重点をおいた、初・中級レベルで多く用いられる読解法である。もう一つは母語話者の自然な読み方である「内容指向の精読」で、その中に熟読(精読)と速読があると述べている。上級に進むにしたがい「言語指向」から「内容指向」、言いかえれば「解説」から「読解」へ移行するのが理想とされる。

先ほどの長い時間をかける学習者の場合は、一つ一つ意味や文法を確認しないと次へ進めない、つまり「言語指向の精読」から抜け出せない状態にあると見られる。また、速いが不正確という学習者の場合も、読み飛ばしや推測をしすぎている、あるいは個々の語の表面的な意味をなぞっているだけで、文章の内容にまで踏み込んでいないという点で、まだ内容指向の読み方ができない状態であると言えるだろう。

そこで、日本語を学習するための読解から抜け出し、母語で読むときの自然な読み方に近づけてみることに、そして広く多くのものを読めるようになることを目標とし、新聞記事を利用した速読練習を行った。本稿では、この練習が学習者の読解ストラテジーや、読むことに対する意識にどのような影響を与えたか、アンケート調査の結果から考察する。

## 2. 新聞記事の「速読」

「速読」といった場合、母語話者を対象としたいわゆる速読術、大量読書術を指すことがある。これは訓練して目の運動能力を上げる、複数行を一度に読む、キーワードを拾っていく、などのテクニックによって、本を数分で読んだり読むスピードを10倍にしたり、というものだが、本稿での速読は、こうした速読術とは異なる。授業で目指した読み方は、一字一句文章を追ってはいくが、立ち止まっていちいち分析はしない、という読み方である。速く読むときの技術として、スキッピング(情報取り)とスキミング(大意取り)があげられるが、スキッピング技術はほとんど要求していない。新聞全体から読みたい記事を探す、といった場合にはスキッピング技術を使うことになるが、授業ではあらかじめ選択された記事を用いて練習した。ここ

で要求したのは、見出しを含め、文章全体をなるべく止まらずに、わからない部分は推測して先へと読み進めること、ただし意味をとるのに重要な文末表現等とはばさないこと、であり、それによって、速く正確にという読み方を身につけることを目標とした。

### 3. 授業の方法

筑波大学留学生センターの補講「読解4」、2000年度3学期と2001年度1学期のクラスにおいて、毎回授業のはじめ20分程度を速読練習に当てた。

練習目的・方法については、初回の授業時に話し合い、合図があるまでは読み始めないこと、辞書を引かないこと、なるべく前の部分に戻らずに次へ読み進めること、といった手順を確認した。辞書については、読む作業が途中で中断されないようにするためと、推測するというストラテジーを使うようにするために、使用を禁じた。制限時間内に課題を終えた場合には、残った時間で辞書を引いてもよいが、重要そうなものを選んでひくように、と指示した。

読むときは記事1本につき3～6分程度の時間制限を設け、タイマーで終了時間を知らせた。この時間設定は、大半の学習者が一通り読んで、課題を終えるくらいの時間で、あわてて読む必要はないがゆっくり読み直しはできない、というくらいである。スピードアップそのものが目的ではないので、時間切れで途中までしか読めなかった、ということはおこらない程度にした。学習者は合図で一斉に読み始めるので、自分が遅いのか速いのかは認識できたであろう。

直後に問題の答え合わせを行い、質問があれば教師が簡単に答えた。1回の授業で1、2本の記事を読み、質疑も含め20分程度で終えるようにしたが、学習者から意見が出て話し合いになる場合もあった。

教材は、新聞記事を素材として、キーワードを探す問題、または正誤問題をつけて使用した。キーワード探しは「いつ、どこで、だれが」といった記事の骨格となる内容を読みとる問題である。答えを書き出すのは時間がかかるので、該当部分に線を引くだけでよいとした。正誤問題は記事についての5～6の文を読み、それが記事の内容と合っているかどうかを○×で答えるものである。

新聞記事の文字数はおよそ360～900字、平均約500字であった。内容はほとんどがニュース記事だが、両学期とも記者によるコラムを1本と投書を1本、あわせて2本ずつの意見文を含んでいる。(参照：資料1、資料2)

それぞれのコースでの練習回数、記事数は次の通りである。

2000年度3学期 回数：8回、記事数：13本  
(内、キーワード探し7本、正誤問題6本)

2001年度1学期 回数：9回、記事数：14本  
(内、キーワード探し7本、正誤問題7本)

#### 4. アンケート調査対象、内容

2000年度3学期に在籍した13名と2001年度1学期に在籍したうちの12名、計25名に対し、コース終了時にアンケートを行った。2学期間継続して受講した学習者には、初めの学期のみ答えてもらった。学習者の内訳は次の通りである。

漢字圏 5名：中国語母語話者

中間圏 9名：韓国

非漢字圏 11名：米国3名、インドネシア2名、ベトナム2名、モンゴル、ウズベキスタン、フランス、フィンランド 各1名

アンケートでは、練習の効果、速さの変化、読み方の変化、新聞記事に対する意識の変化、練習は楽しかったか、など8項目を尋ねた。(参照：資料3)

#### 5. 結果と考察

##### 5. 1 練習の効果はあったか

「速読の練習は効果があったと思いますか」との問いには、8名が「非常にあった」、15名が「少しあった」と答え、計92%が効果があったと答えている。「あまりなかった」と答えたのは韓国の学習者2名で、それぞれ「精読のほうが好きだから時間に追われて読むのはストレスだ」「速読はまだできない、母語でも速読はできない」と述べている。

この母語でもできない、という学習者は続く質問で、読む速さについては「変わらない」が、読み方については「変わったと思う」と答えており、その内容としては「とちゅうで止まらずに最後まで読むようになった」「わからないことばや漢字があっても気にしなくなった」という2項目を選択している。教師側から見れば、効果があったと言えるのだが、学習者としては「速読」の意味を、とにかく速く読むテクニックととらえていた可能性がある。教師側の意図がきちんと伝わっていなかったもので、無用なストレスを与えたことになろう。幸いこの学習者は、練習そのものは「楽しかった」と答えてくれたが、大きな反省点として残った。

##### 5. 2 読む速さについて

速さについては1名が「非常に」、15名が「少し」と、合わせて16名(64%)が「速くなったと思う」と答えている。だが実際にスピードが上がったのかは未調査である。

##### 5. 3 文章の読み方が変わったか

「文章の読み方が変わったと思いますか」との問いには、表1のような結果が出ている。

分析対象とするには漢字圏の母数が少ないのだが、今回の結果では、漢字圏かどうかによる差はあまり見られず、読み方の変化を自覚しているのは全体の半数強である。韓国の学習者には「変わったと思わない」という人はいなかった。

表 1. 文章の読み方について

数字は人数、( )内は%

	非漢字圏	韓国	漢字圏	全 体
読み方が変わったと 思う	6	6	2	14 (56.0%)
思わない	2	0	2	4 (16.0%)
わからない	3	3	1	7 (28.0%)
計	11	9	5	25 (100%)

変わったかどうか「わからない」と答えた学習者が3割近くおり、「思わない」という学習者よりも多くなっている。これらの学習者については、そもそも読み方ということ意識しているのか、という問題があろう。自分がいつもどういう読み方をしているのか、そして練習中の辞書を使えない、時間を限定されている状況ではどうやって読んでいるのか、どうやって読めばいいのか、を意識していなければ、変わったかどうかは判断できない。なんとなく時間だけを気にして課題をこなしていた場合は「わからない」という回答になるであろう。練習回数が十分とは言えないので、練習方法に慣れるだけで終わってしまい、読み方にまで気が回らなかった可能性もある。どちらにしても、練習の目的をしっかりと認識させることができなかつたという点において、教師側の反省すべきところである。

#### 5. 4 読み方はどう変わったか

読み方が変わったと「思う」と答えた学習者には、どう変わったと思うかを尋ねた。選択肢5項目と自由記述の、複数回答で答えてもらった。全回答数は36(1人平均2.6答)で、少ない学習者で1人1項目、多い学習者では1人で5項目を挙げている。選択肢の内容と、それぞれの回答数は表2の通りである。

表 2. 読み方はどう変わったか

数字は回答数

選 択 肢	非漢字圏 (6)	韓国 (6)	漢字圏 (2)	全体 (14)
a)途中で止まらずに最後まで読むようになった	3	3	0	6
b)わからないことばや漢字があっても気にしなくなった	5	2	1	8
c)わからない部分を推測するようになった	5	1	2	8
d)重要そうなところを中心に読むようになった	1	2	1	4
e)速くても、正確に理解しようとするようになった	3	4	1	8
f)その他(自由記述)	2	0	0	2
計	19	12	5	36
1人あたりの回答数(平均)	3.2	2.0	2.5	2.6

全体としてはb(わからなくても気にしない)、c(推測する)、e(速くても正確に)の回答がそれぞれ8名と多く、a(途中で止まらずに)が6名だった。d(重要そうなところを中心に)は少し減って4名だが、500字前後の新聞記事では、重要そうといっても見出しと最初の段落程度である。結局学習者は記事を全面的に読んでおり、今回の練習においては、あまり役に立つストラテジーではなかったように思える。

以下この項目に関して、漢字圏は母数が少ないため、今後さらに調査をすすめてから分析することとしたい。本稿では特に触れないこととする。

b(わからなくても気にしない)、c(推測する)という読み方は、一つ一つ立ち止まる読みからの脱皮と言えるが、非漢字圏学習者6名のうち、5名がこれらの項目を挙げている。韓国の学習者があまり挙げていないのと対照的である。やはり漢字や語彙を障害と感じ、ぶつかるたびに辞書を引いて確認する、という読み方が習慣化していたのではないだろうか。そのうち1名は別の場で、それまでは知らない字、分からない言葉を見たら辞書を引かずにいられなかったが、実際に辞書なしで読んでみたら思ったよりわかったし、おもしろかった、と述べている。

それに対して、e(速くても正確に)は、より正確さを求める読みへの変化と言えるが、韓国の学習者は6名中4名がこれを挙げている。速いスピードで、漢字の拾い読みをしてなんとなくわかったつもりになっていた状態から、とばして読んでいた文末表現などをきちんと読むようになったのではないかと推測される。だが、実際にどうやって正確に読もうとしているのか——文構造に気をつける、語の切れ目に気をつける、翻訳するなど、どのような方法を取っているのかについてはさらに調査をする必要がある。

非漢字圏では6名中3名が挙げているが、うち2名は[a, b]とセットで、1名は[b, c]とセットで挙げており、特にこの項目だけ重点を置いているわけではなく、注意事項の一つに入っているであろう。

fの自由記述の回答2件は、「分からないことばが繰り返されるので、どれが重要なのか、どれがあまり使わないのかわかるようになった」「質問を読んでから文章を読むようになった」というものだった。

## 5. 5 新聞記事に対する意識

読み方ということには直接関係しないが、新聞記事を読みにくい、苦手、と感じている学習者が多いのではないかと、という予測から、「苦手意識は変わりましたか」という質問を試みた。(表3)

その結果、苦手意識が薄くなった、あるいはなくなったという学習者は15名で6割だった。比較的短く、内容的にも読みやすいものが多かったので、抵抗が薄れたのではないかと考えられる。「(実際に)新聞を買って読もうとすればもっと難しいと思う」という意見があった。クラス内で聞いた意見では、縦書きになれていないので目が疲れる、というものもあった。

表3. 新聞記事に対する苦手意識について

	人数 (%)
以前から苦手ではなかった	5 (20%)
苦手意識がなくなった	1 (4%)
苦手意識が薄くなった	14 (56%)
変わらない。やっぱり苦手だ	1 (4%)
わからない	4 (16%)

5. 3で、読み方が変わったと「思わない」と答えた学習者は4名だったが、そのうち3名はここで「(新聞記事は) 以前から苦手ではなかった」と答えている。授業参加以前から新聞記事にはある程度親しんでおり、そのため読み方を変える必要がなかった、あるいは必要を感じなかったということも一つの要因として考えられる。

#### 5. 6 練習は楽しかったか、その他の意見

練習全般については、20名が「楽しかった」、4名が「まあまあ」、1名が「わからない」と答え、「苦痛だった」という否定的な意見は見られなかった。課題の答えはクラス全体で確認しただけで、回収、チェックはしなかったので、間違ってもいいという気楽さがあったかもしれない。

その他自由記述の意見をいくつか紹介する。(以下原文のまま)

- ・もっとよく出てくる漢字や単語を勉強したい。
- ・読んだ記事の中でわからなかった漢字や、語彙を暗記しないと、発展があるかどうかですね…
- ・クラスで読んだ記事は、普通の新聞に出てくる記事より簡単だ、という気がした。
- ・専門的なものでもかまいませんが、もっと面白いのが(こんな事は考えなかったやなるほどと思うぐらいのもの)出してほしいと思う。
- ・日本の文化を接するテーマがあったら、もっとよかったと思います。
- ・毎週記事のテーマが変わって、面白かったと思います。vocabularyも広がったような気がします。

#### 6. まとめと今後の課題

本調査では、実際に読む速度が上がったのか、本当に読み方が変わったのか、ということはいわからない。だが、少なくとも半数の学習者は文章の読み方ということを意識し、より高いレベルの読み方へ移行しようとしていることがうかがえる。また、そうした学習者は多くが複数の新たなストラテジーを使うようになっている。速読練習は、多くのストラテジーを持ち、使い分けられるようになるための一つの助けになったということができよう。

今後の課題としては、まず、速読練習は単に速度を上げるためではなく、速く正確に内容を取るという読み方を目指して行うのだ、ということとをさらに認識させる必要がある。そして、教材の設問方法として、キーワード探し、正誤問題以外のパターンを取り入れ、多様な読解ストラテジーを提示できればと思う。また、正確に読もうとするようになった、という場合、具体的にはどのようなストラテジーを使うようになったのか、どこに注意を向けるようになったのかを明らかにしてゆきたい。

## 参考文献

- 大城朋子 (1997) 「上級レベル学習者のための読解ストラテジーに関する実験的研究 ―速読・多読のための主題文探し―」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第2巻第1号、pp.1-21
- 岡真弓 (1994) 「外国人のための日本語速読コース：カリキュラムデザインと実践」*Proceedings of Princeton Japanese Pedagogy Workshop*, Princeton University、pp.99-104
- 岡まゆみ (1998) 『中・上級者のための速読の日本語』*The Japan Times*
- 小川貴士 (1991) 「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75号、pp.78-86
- 駒井明 (1990) 「上級の日本語教育」『日本語教育』71号、pp.1-15
- 高橋亜紀子 (1998) 「中級日本語学習者の読解ストラテジー ―韓国人学習者の場合―」『言語科学論集』第2号 東北大学文学部言語科学専攻、pp.85-96



## 資料1 教材記事タイトル一覧

2000年度3学期

	記事日付	タイトル	タイプ	文字数
1	2000/11/21	本田が新型ロボット	キーワード	410
2	2000/11/29	白川秀樹さん講演会	キーワード	417
3	1999/6/3	コンビニ駐車場にワニガメ?	キーワード	518
4	2000/3/3	なぜフリーターなの?	キーワード	465
5	2000/8/19	平均寿命ちよっぴり縮む	キーワード	514
6	2000/12/21	一夜漬けは一時の記憶	キーワード	436
7	2000/7/3	ポキャブラ検定	キーワード	556
8	2001/1/3	昨年の交通事故死328人	正誤	360
9	2000/5/24	10代ばかり言葉とか使います	正誤	915
10	2001/1/11	子の名前	正誤	512
11	2000/12/6	おやつ	正誤	671
12	2000/3/31	学生でも困るカタカナ言葉	正誤	474
13	2001/2/20	就職人気ランキング	正誤	367
平均文字数				508.8

2001年度1学期

	記事日付	タイトル	タイプ	文字数
1	2001/3/24	ピーン危機一髪	キーワード	381
2	1999/5/2	将来の夢?手に職、かな	キーワード	686
3	1999/6/3	コンビニ駐車場にワニガメ?	キーワード	518
4	2001/3/22	おしゃべり・お手伝い 得意なロボット	キーワード	563
5	2001/2/12	2500の言語「絶滅」の危機	キーワード	420
6	2001/12/6	成績超優秀 でも勉強大嫌い	キーワード	643
7	2000/2/13	文書作成 6割がパソコン使う	キーワード	656
8	2000/2/10	学生のお城、年々快適に	正誤	527
9	2001/5/12	外国人研究者 筑波離れ?	正誤	476
10	2001/5/15	携帯電磁波の吸収量	正誤	455
11	2001/5/21	学生食堂の壁デザイン	正誤	449
12	2000/10/12	意外に根強いお見合い願望	正誤	383
13	2001/6/7	電車で化粧	正誤	462
14	1999/9/1	優先席の意味 考えて	正誤	569
平均文字数				513.4

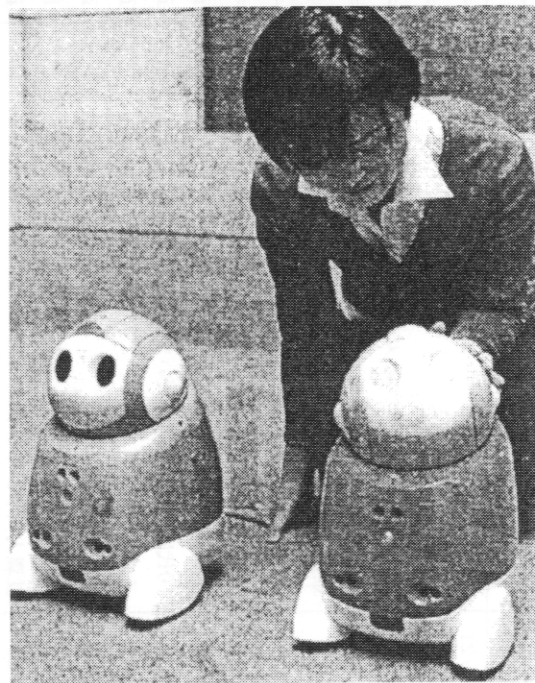
全体平均文字数

511.2字

【問】 次の新聞記事を読んで、キーワードを書き出しなさい。 < 分 >

## おしゃべり・お手伝い、得意なロボット

### 開発のNEC「家族の一員」目指す



(朝日新聞 2001年3月22日)

「調子はどっこい話しかけられるとうれしいなあ」。NECは二十一日、人と意思疎通ができる家庭用ロボット「パペロ」写真Ⅱを開発したと発表した。知り合いを見つけると近づき、おしゃべりをしたり、テレビのスイッチを入れてくれたりする。簡単な手伝いもできる「家族の一員」を志向したロボットだ。約六百五十語を理解し、「グッドモーニング」「ちょっと待ってね」など話せる言葉は約三千語。呼びかけると振り向き、知らない人だったり、いじめていると逃げていくことも。十人ほどの顔も覚えられる。

録音したメッセージなどを伝え、テレビやインターネッ

### 3000語を話しテレビの操作も

トの操作をする機能があるほか、ダンスやぞろぞろなど人を喜ばせてくれる。

頭部の下側が光り怒ったり喜んだり感情を表す。四つのモーターで動き回る。身長は三十八センチ、幅は二十四センチで体重五キログラム。一回の充電で連続二―三時間もつ。

基本ソフトは「ウィンドウズ98」、中央演算処理装置(CPU)はインテル製を使用し、新たな動作の追加などに必要な応用ソフトの開発をしやすいとした。

ソニーなどが動きの面白さを狙ったロボットを開発しているのに対し、NECは「家族の一員と呼べるようなパーソナル型ロボットを追求する」方針だ。

- 1) いつ、だれが
- 2) 何を発表したか
- 3) ロボットが話せる言葉は
- 4) どうやって感情を表すか
- 5) 何を目指したロボットか



8. なにか意見があれば書いてください。

9. あなたの母語は何ですか。